

敦煌禪宗文獻分類目錄

田中良昭

程 正

〈編著類〉

- ・ 鈴木貞太郎（大拙）・^く公田連太郎『敦煌出土六祖壇經』（森江書店,1934）
→ 『鈴木・公田敦煌本壇經』
- ・ 駒澤大學禪宗史研究會編『慧能研究』（大修館書店,1978）→ 『慧能研究』
- ・ 釋如禪主編『『六祖壇經』研究』（一）～（五）〈中國禪學研究系列叢書〉（廣東新興國恩寺編,中國大百科全書出版社,2003）→ 『『六祖壇經』研究』1～5

Ⅱ 語録類 (4)

— 『六祖壇經』 —

24、南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經 六祖慧能大師於韶州大梵寺施法壇經

- ① S5475 ②有 79 (BD08958) ③岡 48 ④敦博本 077 (任子宜舊藏本)
- ⑤旅博本

[テキストの翻刻・校定]

* 表記の説明

- ・ 本目錄は敦煌禪宗文獻に主眼を置いたものであり、煩を避けるため、校本として挙げられた敦煌文獻以外の異本に關するものは原則として割愛する。
- ・ 旅博本の⑤については、郭福純・王振芬の兩氏がつい最近整理した『旅順博物館藏敦煌本六祖壇經』（上海、上海古籍出版社,2011）を除いては、從來その所在が不明とされてきたため、本稿における⑤のすべては『舊關東廳博物館所藏大谷探險隊將來文書目錄』に収録された⑤の首尾3葉の寫真によったものと推定される。

(2)

敦煌禪宗文獻分類目錄 (田中・程)

- ①『大正藏』卷48(1928,pp.337a-345c) — 大
- ①『鳴沙餘韻圖版』(pp.102-103)
- ①『鈴木・公田燉煌本壇經』(pp.1-64) — 鈴
- ①『宇井禪宗史』2(pp.117-171) — 宇
- ①大鈴宇 Chan,W.*The Platform Scripture* pp.24-150,St.John's Univ.press New York 1963.(英譯)
- ①大鈴宇 Yampolsky,P.*The Platform Sutra of Sixth Patriarch* Columbia Univ. press New york and London 1967.(英譯)
- ①『慧能研究』(pp.249-396)
- ①柳田聖山編『六祖壇經諸本集成』〈禪學叢書〉7(中文出版社,1976,pp.1-47)
- ①鈴郭朋『壇經對勘』(濟南,齊魯書社,1981)
- ①鈴郭朋『壇經校釋』〈中國佛教典籍選刊〉(北京,中華書局,1983第1刷,pp.1-115)
- 郭
- ①鈴郭朋『壇經導讀』(成都,巴蜀書社,1987)
- ①退翁性徹譯『敦煌本壇經』(韓國,海印寺藏經閣,1988)
- ①金知見校注「校註敦煌六祖壇經」(金知見編『六祖壇經の世界』〈韓國語〉ソウル,民族社,1989,pp.01-034) — 金
- ③田中良昭「北京本『六祖壇經』について」(『宗學研究』33,1991,p275-280) → 『田中敦煌』2(pp.209-224) — 田
- ① Catherine Toulaly : *Sixieme Patriache / Sutra de la Plate-forme*. Librairie You Feng, Paris 1992. — 田
- ①印順法師校『精校燉煌本壇經』(臺灣,正聞出版社,1993)
- ①④鈴楊曾文校寫『敦煌新本六祖壇經』(上海,上海古籍出版社,1993,pp.1-74)
- ①②③④楊曾文校寫『新版 敦煌新本六祖壇經』(北京,宗教文化出版社,2001,pp.1-80) — 楊
- ①③④⑤潘重規校定『敦煌壇經新書』(臺北,(財)佛陀教育基金會,1994,pp.47-284)
- 潘重規校定『敦煌壇經新書及附冊』(臺北,(財)佛陀教育基金會,2001,pp.47-284)
- 潘
- ①③④⑤鄧文寬『大梵寺佛音—敦煌莫高窟『壇經』讀本』(臺北,如聞出版社,1997)
- ①③④⑤孟東燮「敦煌本『壇經』について」(『禪學研究』75,1997,pp.1-67) — 孟
- ①③④周紹良『敦煌寫本『壇經』原本』(北京,文物出版社,1997,pp.109-174) — 周

- ②方廣錫著·神野恭行譯「敦煌『壇經』新出殘片跋」(『禪學研究』76,1998,p.52)
- ①③④⑤鄧文寬、榮新江錄校『敦博本禪籍錄校』〈敦煌文獻分類錄校叢刊〉(南京,江蘇古籍出版社,1998,pp.199-430) —㉞
- ④李富華『惠能與『壇經』』(珠海出版社,1999,pp.97-150) —㉟
- ①②③④李申合校·方廣錫簡注『敦煌壇經合校簡注』(太原,山西古籍出版社,1999,pp.29-91) —㊱
- ②方廣錫「關於敦煌本『壇經』」(郝春文編『敦煌文獻論集—紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會論文集』瀋陽,遼寧人民出版社,2001,pp.483-484)
- ④柳田聖山·椎名宏雄共編『禪學典籍叢刊』別卷(臨川書店,2001,pp.41-84)
- 鈴楊林光明·蔡坤昌·林怡馨編譯『楊校敦博本六祖壇經及其英譯』(臺北,嘉豐出版社,2004,pp.65-315)
- ①②③④⑤鄧文寬校注『六祖壇經：敦煌「壇經」讀本』(瀋陽,遼寧教育出版社,2005,pp.11-124) —㊲
- ④中島志郎編著『六祖壇經』〈第三期禪語錄傍譯全書〉2(四季社,2006,pp.8-348) —㊳
- ①②③④⑤黃連忠『敦煌本六祖壇經校釋』(臺北,萬卷樓圖書股份有限公司,2006,pp.1-233) —㊴
- ①②③④⑤方廣錫等「敦煌本『壇經』校釋疏義 前言·標題章·第一章·第二章」(『方·藏外』10,2008,pp.329-415)
- ①②③④⑤方廣錫等「敦煌本『壇經』校釋疏義 第三章·第四章·第五章」(『方·藏外』11,2008,pp.311-372)
- ①②③④⑤方廣錫等「敦煌本『壇經』校釋疏義 第六章·第七章·第八章」(『方·藏外』12,2008,pp.361-418)
- ⑤郭福純·王振芬整理『旅順博物館藏敦煌本六祖壇經』(上海,上海古籍出版社,2011,pp.1-86)

[譯註]

- ①㊵鈴『字井禪宗史』2 (pp.114-172)
- ①㊵鈴宇Chan,W.*The Platform Scripture* pp.24-150,St.John's Univ.press New York 1963. (英譯)
- ①㊵鈴宇Yampolsky,P.*The Platform Sutra of Sixth Patriarch* Columbia Univ. press New York and London 1967. (英譯)

- ①大鈴宇柳田聖山「六祖壇經 (六祖の戒壇院說法集)」(同氏『禪語録』〈世界の名著〉續 3, 中央公論社, 1974, pp.93-179) → 同〈世界の名著〉18 (1978, pp.93-179)
- ④佐藤悦成譯『敦煌新本六祖壇經』(全國曹洞宗青年會事務局, 1996, pp.1-169)
- 鈴楊林光明・蔡坤昌・林怡馨編譯『楊校敦博本六祖壇經及其英譯』(臺北, 嘉豐出版社, 2004, pp.65-315) (英譯)
- ④中島志郎編著『六祖壇經』〈第三期禪語録傍譯全書〉2 (四季社, 2006, pp.8-348)

〔著書・論文〕

- 胡適「神會與六祖壇經」(『胡適神會遺集 (上海)』 pp.73-90) → 『胡適神會遺集 (臺北)』 (pp.73-90)
- 松本文三郎「六祖壇經の書誌學的研究」(上)(下)(『禪學研究』17, 1932, pp.29-60, 18, 1932, pp.31-78) → 『正法輪』766-782, 1933, 784-786, 1934) → 松本文三郎「六祖壇經の研究」(同氏『佛教史雜考』創元社, 1944, pp.87-168) → 許洋主譯「『六祖壇經』之研究」(『佛光學報』5, 1980, pp.219-266)
- 矢吹慶輝「南宗頓教最上乘摩訶般若波羅蜜經 六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷」(『鳴沙餘韻解說』, pp.300-303)
- 鈴木大拙「燉煌出土六祖壇經解說及目次」(『燉煌出土神會禪師語録解說及目次, 燉煌出土六祖壇經解說及目次, 興聖寺本六祖壇經解說及目次』森江書店, 1934, pp.21-22)
- いまは せらんざん
今長谷蘭山「六祖壇經研究資料」(『禪學研究』23, 1935, pp.25-28)
- 久野芳隆「流動性に富む唐代の禪宗典籍—燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品—」(『宗教研究』新 14-1, 1937, pp.117-144)
- 鈴木大拙「六祖壇經に關する二三の意見」(『大谷學報』19-1, 1938, pp.1-18)
- 川上天山「西夏語譯六祖壇經について」(『支那佛教史學』2-3, 1938, pp.61-66) → 柳田聖山編『六祖壇經諸本集成』〈禪學叢書〉7 (中文出版社, 1976, pp.432-438)
- 宇井伯壽「壇經考」(『宇井禪宗史』2, pp.1-116) → 楊曾文選譯「『壇經』考」(『六祖壇經』研究』4, pp.259-278)
- 鈴木大拙「六祖壇經, 慧能及慧能禪につきて」(『鈴木禪思想史』2, pp.325-380) → 〈大拙〉2 (pp.310-361)
- 中川孝「六祖壇經の異本に就て」(『印佛研』2-1, 1953, pp.155-156)
- 中川孝「壇經の思想史的研究—燉煌本の内容について—」(『印佛研』3-1, 1954, pp.281-284)

- 關口眞大「神會の南宗獨立」(同氏『禪宗思想史』山喜房佛書林,1964,pp.153-166)
- 柳田聖山「大乘戒經としての六祖壇經」(『印佛研』12-1,1964,pp.65-72) → 同氏編『六祖壇經諸本集成』(『禪學叢書』7 (中文出版社,1976,pp.439-446) → 〈柳田〉1 (pp.359-370)
- 柳田聖山「古本『六祖壇經』の推定,古本『六祖壇經』の課題,古本『六祖壇經』の作者—その1,古本『六祖壇經』の作者—その2」(『柳田史書』,pp.148-212) → 〈柳田〉6 (pp.148-212)
- 柳田聖山「敦煌本『六祖壇經』の成立—その1」,「敦煌本『六祖壇經』の成立—その2」(『柳田史書』,pp.253-278) → 〈柳田〉6 (pp.253-278)
- 中川孝「敦煌本壇經の問題點」(『印佛研』17-1,1968,pp.324-327)
- 印順「壇經之成立及其演變」(同氏『中國禪宗史』臺北,正聞出版社,1971,pp.237-280) → 同(南昌,江西人民出版社,1999,pp.191-225) → 伊吹敦譯「『壇經』の成立と變遷」(同氏譯『中國禪宗史—禪思想の誕生—』山喜房,1997, pp.295-344)
- 中川孝「六祖壇經異本の源流」(『印佛研』21-2,1973,pp.295-298)
- 柳田聖山「六祖壇經」(同氏『禪語録』(世界の名著)續3,中央公論社,1974, pp.66-69) → 同(世界の名著)18(1978,pp.66-69)
- 張曼濤『六祖壇經研究論集』(『現代佛教學術叢刊』1 (臺北,大乘文化出版社,1976,pp.1-352)
- 柳田聖山「敦煌本『六祖壇經』の諸問題」(『敦煌佛典と禪』,pp.19-50)
- 里道德雄「六祖獮猿考(一)—その問題點」(『禪文研紀要』11,1979,pp.23-43)
- 石井修道「眞福寺文庫所藏『六祖壇經』の紹介—惠昕本『六祖壇經』の祖本との關連—」(『駒大佛教論集』10,1979,pp.74-111)
- 石井修道「惠昕本『六祖壇經』の研究—一定本の試作と敦煌本との對照」(『駒大佛教論集』11,1980,pp.96-138)
- 石井修道「惠昕本『六祖壇經』の研究—一定本の試作と敦煌本との對照—續—」(『駒大佛教論集』12,1981,pp.68-132)
- 花塚久義「『六祖壇經』の四乘義」(『宗學研究』25,1983,pp.170-174)
- 小川隆「敦煌本『壇經』の惠能傳に關する一試論」(『駒大大學院年報』18,1985, pp.44-49)
- 小川隆「敦煌本『六祖壇經』と『歷代法寶記』」(『宗學研究』28,1986,pp.175-178)
- 長嶋孝行「現存する『六祖壇經』の五本,七冊の對較と考察」(『印佛研』35-1, 1986,pp.106-108)

- 小川隆「敦煌本『六祖壇經』の成立について」(『駒大大學院年報』20,1987, pp.20-27)
- 小川隆「敦煌本『六祖壇經』における般若について」(『印佛研』35-2,1987, pp.140-142)
- 楊曾文「中日の敦煌禪籍研究和敦博本『壇經』,『南宗定是非論』等文獻的學術價值」(『中日佛教研究』中國社會科學出版社,1989)→麥谷邦夫邦譯「中日兩國の敦煌禪籍研究—及び敦煌縣博物館本『壇經』『南宗定是非論』等の文獻的學術的價值」(『中外日報』23706號,1987年10月23日,pp.10-12)→『『六祖壇經』研究』4 (pp.100-108)
- 田中良昭「〈『壇經』研究〉考—特に最近のテキスト研究を中心として—」(『鎌田茂雄還暦記念論文集 中國の佛教と文化』大藏出版,1988,pp.291-313)→Tr. by Kōichi Shinohara: “Recent Developments in the Textual-Critical Study of the Platform Scripture” pp.229-260, *From BENARES To BEIJING: Essays on BUDDHISM and CHINESE RELIGION* ed by Kōichi Shinohara and Gregory Schopen 1991, MOSAIC PRESS, Oakville New York-London. (英譯)→『田中敦煌』2 (pp.171-193)
- 楊曾文「敦博本壇經的學術價值」(金知見編『六祖壇經的世界』(韓國語)ソウル,民族社,1989,pp.035-049)
- 小川隆「敦煌本『六祖壇經』の成立について(之二)」(『駒大大學院年報』22,1989,pp.9-18)
- 鄭茂煥「『六祖壇經』批判」(『印佛研』38-1,1989,pp.255-259)
- 里道徳雄「『六祖壇經』と道忠禪師解」(『大倉山論集』27,1990,pp.109-163)
- 小島岱山「『六祖壇經』と華嚴—敦煌本『六祖壇經』無相戒の思想と華嚴の性起思想」(『禪學研究』68,1990,p21-48)
- 李雪濤「關於敦煌本『壇經』的幾個問題—與郭朋先生的商榷」(『內明』220,1990,pp.11-15)
- 田中良昭「北京本『六祖壇經』について」(『宗學研究』33,1991,pp.275-280)→『田中敦煌』2 (pp.209-224)
- 田中良昭「敦煌本『六祖壇經』諸本の研究」(『松ヶ岡年報』5,1991,pp.9-38)→『田中敦煌』2 (pp.195-208)
- 金知見「敦煌壇經の隨想—その反省と展望」(『佛教文化學論集 前田惠學博士頌壽記念』山喜房佛書林,1991,pp.416-430)
- 古賀英彦「敦煌本六祖壇經の心偈について」(『禪學研究』70,1992, pp.1-11)
- 楊曾文著・高洪譯「慧能と『六祖壇經』に關する3つの問題」(『禪研究所紀要』21,1992,pp.15-25)

潘重規「敦煌本『六祖壇經』讀後管見」（『中國文化』7,1992,pp.48-55）→『『六祖壇經』研究』4（pp.144-164）

潘重規「敦煌寫本『六祖壇經』中的“獼猴”」（『中國唐史學會會刊』1992-3）→『中國文化』1994-9→『『六祖壇經』研究』5（pp.206-216）

楊曾文「附編（二）『壇經』敦博本的學術價值和關於『壇經』諸本演變、禪法思想的探討」（同氏校寫『敦煌新本六祖壇經』上海,上海古籍出版社,1993,pp.183-325）→同氏校寫『新版 敦煌新本六祖壇經』北京,宗教文化出版社,2001,pp.197-343）

史金波「西夏文『六祖壇經』殘頁譯釋」（『世界宗教研究』1993-3,pp.90-100）→『『六祖壇經』研究』4（pp.84-99）

張子開「敦煌寫本『六祖壇經』校讀拾零」（『四川大學學報 哲社版』,1998,pp.65-71）→『『六祖壇經』研究』5（pp.148-162）

高堂晃壽「敦煌本『壇經』における戒の構造」（『駒大禪研年報』4,1993,pp.125-139）

鄧文寬「英藏敦煌本『六祖壇經』通借字芻議」（『敦煌研究』1994-1,pp.79-86）→『『六祖壇經』研究』4（pp.191-205）

佐藤悦成「『敦煌新本六祖壇經』試譯1」（『禪研究所紀要』23,1994,pp.177-200）

佐藤悦成「『敦煌新本六祖壇經』試譯2」（『禪研究所紀要』24,1995,pp.167-193）

蒙默「壇經中「獼猴」一詞讀法——與潘重規先生商榷」（『中國文化』1995-11）→『『六祖壇經』研究』5（pp.228-232）

周紹良「敦煌本『六祖壇經』是慧能的原本—『敦博本禪籍錄校』序」（『敦煌吐魯番研究』1,北京,北京大學出版社,1995,pp.301-311）→同氏「敦博本禪籍錄校序二」（鄧文寬、榮新江錄校『敦博本禪籍錄校』〈敦煌文獻分類錄校叢刊〉南京,江蘇古籍出版社,1998,pp.1-26）→『『六祖壇經』研究』4（pp.25-40）

伊吹敦「敦煌本『壇經』の形成」（『印佛研』44-1,1995,pp.77-81）

伊吹敦「敦煌本『壇經』の形成—惠能の原思想と神會派の展開—」（『論叢 アジアの文化と思想』4,1995,pp.01-0266）

古賀英彦「壇經敦煌本の傳法偈」（『禪學研究』73,1995,pp.51-61）

古賀英彦「壇經神會原本へ」（『花大紀要』28,1996,pp.27-47）

衣川賢次「『敦煌新本六祖壇經』補校」（『俗語言研究』3,1996,pp.69-85）

鄧文寬「敦煌本『六祖壇經』書寫形式和符號發微」（中國文物研究所編『出土文獻研究』3,北京,中華書局1996,pp.228-233）→『『六祖壇經』研究』5（pp.271-281）

鄧文寬「敦煌本『六祖壇經』“獼猴”芻議」(『敦煌吐魯番學耕耘錄』〈敦煌叢刊二集〉7,臺北,新文豐出版公司,1996,pp.219-232)

鄧文寬「『壇經校釋』訂補」(『文史』42,北京,中華書局,1997,pp.83-104) → 『『六祖壇經』研究』5 (pp.42-81)

古賀英彥「『敦煌本六祖壇經』研究雜記」(『禪學研究』75,1997,pp.1-15)

鄧文寬「近年敦煌本『六祖壇經』整理工作評介」(『周紹良先生欣開九秩慶壽文集』北京,中華書局,1997,pp.196-207) → 『『六祖壇經』研究』4 (pp.240-258)

張勇「敦煌寫本『六祖壇經』校讀瑣記」(『六祖慧能思想研究』〈“慧能與嶺南文化”國際學術研討會論文集〉學術研究雜誌社,1997,pp.298-304)

方廣錫著・神野恭行譯「敦煌『壇經』新出殘片跋」(『禪學研究』76,1998,pp.49-55)

鄧文寬「敦煌本『六祖壇經』口語詞釋」(『敦煌吐魯番研究』3,北京,北京大學出版社,1998,pp.97-103)

李申「三部敦煌『壇經』校本讀後」(『禪學研究』3,南京,江蘇古籍出版社,1998,pp.36-55) → 『『六祖壇經』研究』5(pp.104-140)

近藤章正「『六祖壇經』の一考察」(『印佛研』48-1,1999,pp.203-205)

近藤章正「『六祖壇經』と神會」(『駒大大學院年報』33,2000,pp.19-30)

鄧文寬「英藏敦煌本『六祖壇經』的河西特色—以方音通假爲依據的探索」(『1994年敦煌學國際研討會論文集・宗教文史卷上』〈紀念敦煌研究院成立五十周年〉甘肅民族出版社,2000,pp.105-119) → 『『六祖壇經』研究』5 (pp.174-190)

大西龍峯「『六祖壇經』の壇について」(『宗學研究』43,2001,pp.215-220)

方廣錫「關於敦煌本『壇經』」(郝春文編『敦煌文獻論集—紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會論文集』瀋陽,遼寧人民出版社,2001,pp.481-499) → 『『六祖壇經』研究』4 (pp.188-210)

楊曾文「關於敦煌本『六祖壇經』中“無相戒”的考察」(『法源』19,2001)

椎名宏雄「解題四『南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經六祖慧能大師於韶州大梵寺施法壇經』一卷」(柳田聖山・椎名宏雄共編『禪學典籍叢刊』別卷(臨川書店,2001,pp.434-439)

張子開「敦煌寫本『六祖壇經』的題名」(『宗教學研究』2002-3,pp.43-53)

高堂晃壽「敦煌本『壇經』の悟達觀より見た神會派—その成立への關與をめぐって」(『佛教文化研究論集』6,2002,pp.109-131)

方廣錫「敦煌本『壇經』首章校釋疏義」(『中國禪學』1,2002,pp.98-114) → 『『六祖壇經』研究』5 (pp.10-41)

張勇「唐五代禪宗的修習典範—以敦煌寫本『六祖壇經』爲考察範圍」（『普門學報』10,2002,pp.71-87）

劉昌佳「『坐忘論』與『壇經』心性論之比較」（『宗教哲學』8-2,臺北,中華民國宗教哲學研究社,2002,pp.168-184）

鄭茂煥（性本）「敦煌本六祖壇經與心地法門」（『普門學報』13,2003,pp.41-76）

張子開「敦煌本『六祖壇經』的修辭」（『敦煌研究』2003-1,pp.55-60）

楊曾文「敦煌本『壇經』的佛經引述及其在慧能禪法中的意義」（『田中良昭博士古稀紀念論文集 禪學研究の諸相』大東出版社,2003,pp.027-042）

方廣錫「關於敦煌本『壇經』的幾個問題」（『田中良昭博士古稀紀念論文集 禪學研究の諸相』大東出版社,2003,pp.043-058）

釋如禪主編『『六祖壇經』研究』1～5,〈中國禪學研究系列叢書〉（廣東新興國恩寺編,中國大百科全書出版社,2003）

張新民「「獼猴作佛」公案與東山禪法南傳—讀敦煌寫本『六祖壇經』劄記」（『中華佛學學報』16,2003,pp.109-132）→同（釋妙峰·釋傳正主編『曹溪禪研究（二）』中國社會科學出版社,2003,pp.323-342）→同（『中華文史論叢』80,2005,pp.209-237）

林崇安「六祖壇經的祖本及其演變略探」（『法光雜誌』172,2004）→『林崇安佛學論文選集』（內觀教育基金會,2004初版,2008再版,pp.119-126）

鄧文寬「敦煌本『六祖壇經』的整理與研究—在中國國家圖書館的演講」（『敦煌與絲路文化學術講座』北京圖書館出版社,2003,pp.438-466）→同氏校注『六祖壇經：敦煌「壇經」讀本』（瀋陽,遼寧教育出版社,2005,pp.127-167）

付義「『壇經』版本管窺」（『宗教學研究』2005-1,pp.144-146）

槻朝子「敦煌本『六祖壇經』と『金剛經解義』について」（『駒大大學院年報』38,2005,pp.71-86）

黃連忠「從敦博本六祖壇經論惠能的頓悟禪學思想與功夫實踐哲學」（『通識課程論文研討會論文集』高苑科技大學通識教育中心,2006,pp.85-110）

黃連忠「敦博本六祖壇經文獻學考察及其學術價值的再衡定」（「佛教史與佛教藝術：明復法師圓寂一週年紀念研討會」發表論文,2006）

黃連忠「百年來敦煌寫本六祖壇經的發現與研究之論評」（武漢大學主催「佛學百年國際學術研討會」發表論文,2006）

邱敏捷「『壇經』的作者與版本—印順與胡適及日本學者相關研究觀點之比較」（第6屆「印順導師思想之理論與實踐」學術會議論文集,2006）

餘琇「關於敦博本『六祖壇經』惠能生平部分經文的傳奇性研究」（四川大學

碩士論文,2007)

黃連忠「敦博本六祖壇經文字校正與白話譯釋的方法論」(『敦煌學輯刊』4,2007,pp.97-113)

陳清香「六祖圖像與壇經版本」(『慧炬雜誌』513,2007,pp.3-7)

陳明聖「敦博本『六祖壇經』的禪學思想研究」(南華大學文學研究所碩士論文,2007,pp.1-134)

蔣宗福「敦煌本『壇經』相關問題考辨」(『宗教學研究』2007-4,pp.83-91)

黃連忠「敦煌寫本六祖壇經的發現與文字校訂方法芻議」(『法鼓佛學學報』1,2007,pp.71-102)

黃連忠「敦博本六祖壇經的禪宗美學思想及其學術意義」(『高苑學報』14,2008,pp.331-346)

方廣錫「敦煌本『壇經』錄校三題」(『方・藏外』10,2008,pp.419-442)

吳士田「敦煌寫本『壇經』中的書寫符號」(『河北青年管理幹部學院學報』2009-2,pp.47-50)

秦萌「解讀敦煌本『壇經』中的“三無”」(『浙江學刊』2009-2,pp.40-46)

齋藤智寬「臺のない鏡—『六祖壇經』呈心偈考—」(『集刊東洋學』101,2009,pp.43-62)

李婧「敦煌本『壇經』語言研究」(上海師範大學碩士論文,2010)

魯立智「『壇經校釋』釋義匡補」(『文史博覽』2010-8,pp.17-19)

宋雲鳳「『六祖壇經』中「無相頌」之法義初探—以敦煌本『壇經』爲主合併對讀宗寶本」(『法光』255,2010,pp.2-4)

王聲憶「神秀慧能“呈心偈”解析——論禪宗史上『壇經』兩個傳承系統的可能性」(『理論界』2011-1,pp.135-141)

千田たくま「敦煌本『壇經』無相戒儀の思想と成立時期」(『佛教史學研究』53-2,2011,pp.1-16)

王振芬「旅博本『壇經』的再發現及其學術價值」(『敦煌吐魯番研究』12,上海古籍出版社,2011,pp.367-380)

[略記]

本書は、六祖惠能が韶州大梵寺の授戒會において戒壇に昇り、高座にて説法した内容を、弟子の法海が集録したものという形式がとられている。それは本来「惠能語録」というべきものであるが、古來その成立及び内容について種々

の疑問が投げかけられる一方、多くの異本が存在する極めて問題の多い書である。その数の多い異本の中で、敦煌本としてはスタイン本の①が発見紹介されて以来、それが長いあいだ現存する唯一にして最古の寫本として重視されてきた。

周知の通り、經・律・論の「三藏」に分類される佛教文獻の中では、釋尊が説かれたものに限り、「經」と尊稱されることが許されている。もちろん、中國佛教においては僞經と呼ばれる一群のものが存在し、それらは釋尊自身によったのではなく、釋尊に假託されたものではあったものの、いずれも眞の作者を意圖的に隠し、あたかも釋尊自らが説かれたかのように仕上げられていたものである。ところが、本書は、こうした僞經と稱されるものとは明らかに異なった性格を有しており、釋尊ではなく六祖惠能という偉大な禪僧によったものであることを堂々と宣言した上で、敢えて「經」という釋尊専用の呼稱を與えられていることから、本書の中國禪宗、ひいては中國佛教において超然たる地位を占めていることが容易に推察されよう。それゆえに、中國禪思想の要と位置づけられた本書は、長い間最も重要な研究對象とされ、その研究内容は極めて多岐にわたっており、それらを集約することが容易でないことは明らかである。そこで、本目録においては、専ら敦煌文獻から出現した本書、すなわち敦煌本『壇經』に的を絞り、これを主とした研究成果のみを取り上げ、流布本をはじめとする他の『壇經』の諸本に關する、或いはそれらを用いた研究成果についてはこれを割愛することにした。

ところで、スタイン本の①が発見された以降今日にいたるまでに、このほかに4種の存在が知られるにいたった。まず、敦煌の任子宜氏の舊藏になるという④は、向達氏の「西征小記」（『唐代長安與西域文明』生活・讀書・新知三聯書店、1957）によってはじめて世に知られたもので、それは『南宗頓教最大大乘壇經』といわれ、神會の『壇語』『定是非論』、淨覺の『心經注』との4種を含めた凡そ93葉からなる梵夾式蝶装本の様式を有する五代宋初の傳抄本とされている。それは最初に書寫された『定是非論』の首部1葉12行と、最後にある淨覺の『心經注』の末尾の1葉が缺けているものの、本書を含む残りの2種はいずれも完本であるというが、任子宜氏の亡き後、長い間その所在が不明とされていた。これが現在の敦煌市博物館に所藏されていることが、敦煌縣（現、敦煌市）博物館編「敦煌縣博物館藏敦煌遺書目録」（『敦煌吐魯番文獻研究論集』3、北京大學出版社、1986）の記載によって知られるにいたった。その内容は楊會文氏の校寫になる『敦煌新本六祖壇經』（上海古籍出版社、1993）において初

めて明らかにされたのである。この敦博本④の再発見の経緯については、この書に付された周紹良氏による序文によれば、次の通りである。すなわち、1986年に敦煌吐魯番學會の成立に際して周氏が敦煌の現地に招待され、その博物館に展示されていた④を見かけた後、当時古文獻研究室に所屬していた鄧文寬氏に依頼してそれを撮影し、その寫眞を楊曾文氏に提供した。その研究成果として刊行されたのが、楊曾文氏の校寫になる『敦煌新本六祖壇經』であるというのである。

さらに、楊曾文著・麥谷邦夫譯の「中日兩國の敦煌禪籍研究—及び敦煌縣博物館本『壇經』『南宗定是非論』等の文獻の學術的價值」(『中外日報』23706號、1987年10月23日)によれば、敦博本の④は42葉(84頁)あり、每半葉6行、1行25字、全體で12,000字前後あり、題目と内容はスタイン本の①と同様で、同一種の『壇經』テキストの別の抄本であるという。しかも楊氏の調査によれば、従来①は3行68字を脱漏していて、前後の文句が不連続になっているが、④によってこの3行の内容を復元することが可能となったという。また、かつて①と④とに共通する祖本(敦煌原本)が存在していたが、それは法海の祖本が傳承されてからのち、神會の弟子、或いはその影響を受けた人物の手によった改編本であると斷定できるとし、しかもその成立を概ね唐の開元20年(732)から『寶林傳』の成立した唐の貞元17年(801)の間と推定された。なお、楊曾文氏はこの論文をベースにし、増廣して完成したものを、『『壇經』敦博本の學術價值和關於『壇經』諸本演變、禪法思想的探討』と題し、「附編(二)」として同氏の校寫になる『敦煌新本六祖壇經』(上海、上海古籍出版社、1993→同氏校寫『新版 敦煌新本六祖壇經』宗教文化出版社、2001)に収録されたのである。

この④に續いて本書のテキストとして研究者の目を引きつけたのが、北京本の③である。すなわち、田中良昭氏が「敦煌本『六祖壇經』諸本の研究」(『松ヶ岡年報』5、1991→『田中敦煌』2)と題する論文を發表し、③を本書のテキストとしてはじめて本格的な研究を展開したのである。田中氏は黄永武氏の編著になる『敦煌遺書最新目録』を精査し、その結果③の存在に氣づいた。田中氏の紹介によれば、③の表には『大乘無量壽宗要經』が書寫されており、その裏を利用して本書が書寫されているもので、當時③はその存在の知られていた①、④、⑤がすべて蝶装本であったのに對し、卷子本であることが第一の特徴であるという。その内容については、①の本文が45葉90頁からなっているのに對し、③はその23頁最後の第6行の下より8字目から始まり、49頁末まで

に相当し、全體の30%弱になるという。この北京本の③に本書が書寫されていることを最初に指摘したのは陳垣氏であり、この情報をその著『敦煌劫餘録』に記していることがやがて中國の學者によって指摘された。しかしいち早く陳氏によって指摘されたにもかかわらず、本書のテキストである③に關する研究は、前述の田中氏の研究までの長い間、手付かずのままであったのである。

ところで、1997年4月、方廣錫氏が當時の北京圖書館（現、中國國家圖書館）での敦煌遺書の整理作業中に、これまで篇名が附けられていない遺書の中から、②が本書の殘片であると鑑定し、神野恭行氏による邦譯の「敦煌『壇經』新出殘片跋」（『禪學研究』76、1998）と題する論文で、それを公にされたのである。方氏の紹介によれば、②は1枚のみの殘片で、首部は切り取られ、末尾は闕けているというが、寫真で見る限り實際は末尾が闕けているというよりも、擱筆されたというほうがより正確である。また②はもともと卷子装のもので、その形状は17cm×25.3cm、黒の罫線入りで、あわせて10行あるうち前半の5行のみに1行17字で經文が書寫されているという。その内容は、1行目の「迷妄即自悟、佛道成行誓願力。今既發四弘誓」より始まり、5行目の「外道。願自三寶」までの77字があるが、2行目から3行目にかけて書寫されている「大師言、善／知識」というキーワードを境に『壇經』本文にあった140字あまりが抜けていて、そこに書寫漏れがあったとされている。方氏によれば、古代の敦煌寫經では、正本となる寫本に寫し間違いがあつて破棄する場合は、紙を節約するために、誤寫部分を切り取って白紙を貼り附けたのち、そこにつづけて書寫することが多々あるとし、「敦煌にはかつて標準的な卷軸装の形式によって書寫された『壇經』が存在していたことを物語っている」と指摘した上で、こうした書寫漏れのあつたものが、藏經洞から發見されたことからすれば、敦煌文書の封印に關する假説として提起された「圖書館説」や「避難説」では説明がつかず、むしろ「廢棄説」の證左となりうるというのである。

今1つの旅順博物館所藏の⑤は、『敦煌遺書總目索引』所收の「敦煌遺書散録」中、「旅順博物館所存敦煌之佛教經典」の179番に記されたもので、そこには「南宗頂教（最上大乘摩訶般若波羅蜜多經）」とあり、「頂」は「頓」の誤りとみられるからして、これも本書の一異本であることが知られていた。この旅博本の⑤は、いわゆる日本に將來された大谷文書の1種で、1916年に大谷光瑞氏が旅順に移住した際に、當時成立したばかりの關東都督府滿蒙物産館（後の關東廳博物館、旅順博物館の前身）に持ち込まれたもので、終戦後、ま

ず 1945～1951 年の間は舊ソ連の管理下に置かれた後、中國に返還されたのであるが、2009 年に旅順博物館が收藏品に対して調査を行った際、同博物館の研究者である王振芬氏によって再発見されるまでの長い間、そのゆくえが不明とされてきたのである。この間、戦前に製作された目録を除けば、旅博本の⑤の中身を知る唯一のてがかりは、1989 年に刊行された井ノ口泰淳、白田淳三、中田篤郎の 3 氏の編になる『舊關東廳博物館所藏大谷探險隊將來文書目録』に龍谷大學所藏の⑤の首尾を撮影した寫眞 3 枚が存在するのみであった。

⑤を再発見した王振芬氏の紹介によれば、⑤は冊子本で、①のスタイン本、④の敦博本と同様に完本である。しかも現在知られている敦煌本『壇經』の諸寫本の中では、唯一段落記號や句讀點が朱でつけられており、誤字脱字の最も少ないものであるという。ちなみに王氏は、旅博本の⑤が半世紀以上にわたり発見されなかった原因については、旅順博物館が舊ソ連から中國に移管されてから收藏品の點檢が行われたのであるが、その際舊大谷文書の確認作業に当たった作業チームと圖書の點檢作業に当たったチームとが別々であったために、敦煌遺書によくみられる卷子本の形態を有していない冊子本の旅博本は、一般圖書と混同され、圖書として登録されてしまったのではないかと分析されている。

従って、1986 年に④の敦博本が再発見されるまでは、現存唯一の寫本とされてきたスタイン本の①についてその概要を述べれば、以下の通りである。すなわち、この①は、褐色の比較的厚い紙 2 紙を真中で折って、赤糸で綴じて 1 帖 8 頁とし、これが 13 帖あって全體で 104 頁、縦 27cm、横 10.5cm の長方形の手帖本である。この形式は、『無心論』と『頓悟無生般若頌』の前半を有する S5619 と同一である。紙質も兩者ほぼ同じであるが、この方は 3 紙を 1 帖とし、大きさも縦 14.5cm、横 10cm と小さい。

次にその書寫形式であるが、首部 1～4 頁と尾部 97～104 頁は共に白紙で、首題は 5 頁に記されている。第 1 行に「南宗頓教最上乘摩訶般若波羅蜜經」、第 2 行第 3 行は 2 字下げとなつて、第 2 行に「六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷」、第 3 行に「兼受無相 (3 字アケ) 戒弘法弟子法海集記」となっている。その後各頁平均 6 行、1 行 22～28 字で本文が書寫されているが、字の大小、行の曲り、誤字、脱字、あて字等が多く、かなりの粗惡本である。88～89 頁は、恐らく頁をめくる際に誤つて重ねてめくつたとみられ、白紙になっている。尾題は 95 頁の 5 行目に、本文最後の「蜜意」の 2 字の下に 1 字あけて、「南宗頓

教最上大乘壇經法一卷」とあり、「法」の1字の違いはあるが、④の首題と一致する。96頁は1～4行にわたって菩薩の法號が記されて擱筆し、以下は104頁まで白紙となる。

このスタイン本の①を最初に発見したのが矢吹慶輝氏である。1928年に『大正藏』巻48に収めると共に、1930年に『鳴沙餘韻』に影印を収録され、1933年にその解説『鳴沙餘韻解説』を出版し、その篇外の稀覯殘卷として本書を解説された。ただこの中で矢吹氏は、S5475をS377とされているが、これは『無心論』のS5619をS296とされたと同様に、假の番號によったとみられ、訂正を要する。矢吹氏は解説の中で、本書に關する先行論文として、胡適氏の「神會與壇經」、松本文三郎氏の「六祖壇經の書誌學的研究」を挙げられ、松本氏に敦煌本、興聖寺本、明藏本の3本の對比、胡適氏に壇經神會撰述説のあることを述べ、自らは本書が法海の集記に基づき神會一派の製編であること、法海、道際、悟眞の三代に傳授されたこと、敦煌本が古型を傳え、明藏本は多くの加筆がなされ、興聖寺本はその中間に位置すること、西夏文壇經殘本の存すること等を論述された。

翌1934年に鈴木大拙氏は、公田連太郎氏と共に本書を宋元の刊本と校合し、興聖寺本との對比を容易にするために、全體を57段に分けて校定出版された。ついでペリオ本『絶觀論』の紹介を中心に、唐代禪宗典籍を論述された久野芳隆氏は、胡適説と同じく本書の神會撰述説を主張された。

先に矢吹氏が關説された西夏語譯『壇經』については、1938年に川上天山氏が「西夏語譯六祖壇經について」（『支那佛教史學』2-3、1938→柳田聖山編『六祖壇經諸本集成』中文出版社、1976）と題する論文で紹介された。この西夏語譯『壇經』については、柳田聖山氏の「禪籍解題」（『禪家語録』II付録）に2種の存在を報じている。いずれも西田龍雄氏の解説に依っているが、川上氏紹介のものは殘簡6葉で、本文は敦煌本にもっともよく一致し、西夏の惠宗季秉帝即位4年（1071）に翻譯されたもので、西夏文としてはもっとも初期のものに屬し、更にこれを中國語に重譯したものがあるという。今一つは龍谷大學所藏（橘瑞超氏舊藏）の殘片1葉で、『西域文化研究』第4「中央アジア古代語文獻」の圖版41に發表されたものであり、前者に接續し元來は同一本であったらしいという。本書の流通における朝鮮、日本と別の流れを示すものとして注目すべきものである。

鈴木、公田兩氏による本文校定の成果は、1941年の宇井伯壽氏による「壇

經考」(『宇井禪宗史第二』)の勞作へと續く。宇井氏はその校訂譯註に際し、古型すなわち惠能の説法を伝える部分と、後世神會の徒による附加とみられる部分とに分け、後者を細字で示してその古型を推定された。また本書の多くの異本についても詳細な検討を加え、敦煌本を基に大乘寺本、興聖寺本、徳異本、宗寶本の増減を對照表で示された。

先に校定本を出された鈴木氏は、1951年に『禪思想史研究』第2において、本書は「法海集記」と明記しており、法海や神會を中心とした南宗の傳授本として付囑傳承されたもので、その傳授の間に附加がなされたとの見解を述べられ、胡適氏の神會撰述説を「そう一概には結論出來ぬ」として批判された。宇井氏の行った古型部分と附加部分を辨別する方法は、その後中川孝氏に承けつがれていったが、撰者の問題は、その後1964年に關口眞大氏が本書と『壇語』との密接な關係から、胡適氏の見解に賛同して、「神會、もしくは神會一派の成立せしめたもの」(『禪宗思想史』p.163)とされ、かくして本書の主要部分を神會作とする胡適説、久野説、神會又は神會一派の作とする矢吹説、關口説に對し、惠能の説法集に一部附加されたとする鈴木説、その附加を神會一派によるとする宇井説等が出されて、容易に結論が出なかったのである。

こうした古型部分の作者が、惠能、神會乃至は神會一派、すなわち南宗系の人であるとする従來の諸説に對して、まったく別の見地から、それを牛頭系、特にその六祖慧忠のものではないか、とする新説を出されたのが柳田聖山氏である。柳田氏は既に1964年に「大乘戒經としての六祖壇經」と題する論文にて、独自の無相心地戒を説く本書に注目されていたが、1967年に刊行された『初期禪宗史書の研究』では、それを一歩進めて、この革新的無相戒の主張こそ、惠能系とは違った南北兩宗と流れを別つ牛頭系のものであるとみることによって、今日みることのできる敦煌本『壇經』となる過程がかなり自然に推知できるのではないかと推論された。この柳田説を含む従來の諸説については、その後出版された印順氏の『中國禪宗史』(臺北、正聞出版社、1971)では、これらの諸説を逐一批評はせずに自己の結論を述べると前置きして、次のようにいわれる。すなわち法海が集記した本書原本は、大梵寺の開法を記録した原始的な主體部分と、平時の弟子との問答、臨終の付囑、滅後の状況を記した附録部分とに二分してみるべきで、前者は惠能生前に成立していたもの、後者は弟子が集録して前者の後に附加したものであり、今日の敦煌本は、悟眞が傳授本として傳持していたものを、神會門下が修補したものであるとする。従って

この印順説は、宇井説に最も近いものであるが、成立問題はなお流動的であり、更に今後の研究をまたねばならなかった。

こうした成立問題とは別に、本書には、チャン氏、ヤンポルスキー氏による2種の本文校定と英譯がある。すなわち、①大鈴字を用いたChan, Wing-tsit. *The Platform Scripture* pp.24-150, St. John's Univ. press New York 1963. と①大鈴字を用いたYampolsky, P. *The Platform Sutra of Sixth Patriarch* Columbia Univ. press New York and London 1967. である。その後の本書の本文校訂と佛譯本として、Catherine Toulally : *Sixieme Patriache / Sutra de la Plate-forme*. Librairie You Feng, Paris 1992. があるが、最新の研究として、はじめて敦煌から出現した諸本の中で最善のテキストとされる敦博本の④の英譯を試みられたのが、林光明・蔡坤昌・林怡馨編譯『楊校敦博本六祖壇經及其英譯』（臺北、嘉豐出版社、2004）である。

ところで、中川孝氏は「六祖壇經の異本に就いて」（『印佛研』2-1、1953）、「壇經の思想史的研究—敦煌本の内容について—」（『印佛研』3-1、1954）と題する論文を發表され、その中では、敦煌本を村山運榮氏舊藏宋本五山覆刻初刷本及び大乘寺本と對校し、荷澤神會が原始壇經本に手を入れ、文獻のかたちとして後世に伝えたいと願ったものとされている。

一方、當時では容易に實見することのできなかった本書の諸本をそれぞれマイクロフィルムに撮影し、これらを集大成して影印本として出版したのが、柳田聖山氏の編著になる『六祖壇經諸本集成』（中文出版社、1976）である。本書の敦煌本①をはじめとする14種のテキストを蒐集し、さらに本書に関する參考資料と主要な研究成果までを網羅して、後人の研究に頗る便宜をはかられた。さらに、駒澤大學禪宗史研究會が8年にわたる共同研究の成果として『慧能研究』（大修館、1978）を刊行している。その内容は、慧能の傳記研究を中心とした研究篇と、慧能を研究するための資料研究を中心とした資料篇とからなるものである。本書のテキストについては、その資料篇の第1章に、本書の5本對照と「六祖壇經について」と題する解題がある。5本とは、寫本としての敦煌本①、大乘寺本の2種と、刊本としての興聖寺本、德異本、宗寶本の3種のことである。これらの諸本を上下5段に並記し、内容の比較を可能にした點にその特色があり、これによって變遷が著しい本書の本文にみられる出入の實態をより明確にすることができたのである。

また石井修道氏は、まず「眞福寺文庫所藏『六祖壇經』の紹介—惠昕本『六祖壇經』の祖本との關連—」（駒大佛敎論集10、1979）と題する論文を發表さ

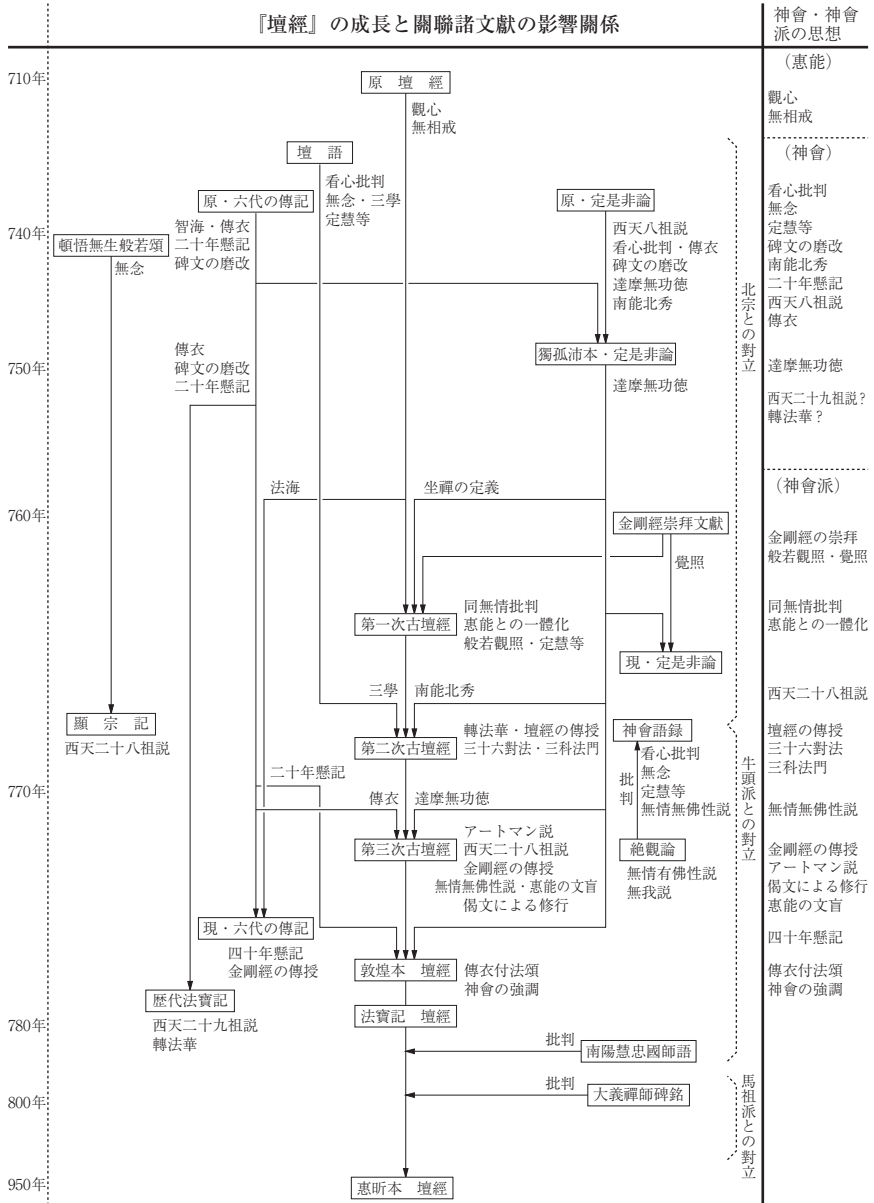
れた。それは、オリジナルの恵昕本(967)は未見であるが、眞福寺文庫所蔵本はそれを推定できる最も古い寫本で、敦煌本から恵昕本に移る重要なテキストであると推定された。そして、「恵昕本『六祖壇經』の研究一定本の試作と敦煌本との對照一」(『駒大佛教論集』11、1980)、とその續編(同12、1981)において、その覆刻を試みられたのである。石井氏の論文は、大乘寺本と興聖寺本の祖本である恵昕本を眞福寺本によって推定し、それと敦煌本とを比較對照する點に特色があり、この論文によって現在我々が利用することのできる本書諸本の内、現存最古の敦煌本(790頃)と、それに續く恵昕本(967)の本文及び書き下し文が、比較對照しやすい形で提供されたのである。

ところで、小川隆氏の「敦煌本『壇經』の恵能傳に關する一試論」(『駒大大學院年報』18、1985)は、本書冒頭の恵能傳に注目し、歴史人物としての恵能の行實のみならず、そこに託された思想と心情を探り出そうと試みられ、恵能傳における『金剛經』との邂逅や心偈競作の話などを中心に檢證し、本書の「恵能傳の構成が、古層部分の論理を形象化し、その主張を體現した具體的モデルを提示する意圖を持っていることが明らかになった」とした上で、後世、多くの語録、燈史に採り入れられ、一人歩きしてゆくこの恵能傳も、本來は『壇經』の教説を布教する手段として創作されたものだったと指摘されたのである。また、同氏の「敦煌本『六祖壇經』と『歷代法寶記』」(『宗學研究』28、1986)と「敦煌本『六祖壇經』の成立について」(『駒大大學院年報』20、1987)、「敦煌本『六祖壇經』の成立について(之二)」(『駒大大學院年報』22、1989)は、本書を前半部分の古い層と後半部分の新しい層とに分けることができ、前半部分が韶州大梵寺における壇上説法の記録、後半部分が晩年の曹溪山での問答録、という設定・形式上の違いがあり、さらに、前半部分が荷澤神會の後繼者達によったと思われる『金剛經』宣揚の言説をはじめとする神會系の教説を素材として多用しているのに対し、後半部分が『歷代法寶記』の教説に對抗しつつ、それを吸収したとみている。

一方、本書に登場する五祖弘忍と恵能の初對面において交わされた「獼猴佛性」の問答は、恵能が上機根である明證の1つとして注目されてきた。この「獼猴」については、里道德雄氏が「六祖獼猴考(一)―その問題点」(『禪文研紀要』11、1979)と題する論文で、「六祖が獼猴族出身であるか否かについては勿論判然としない」としつつも、本書を含む種々の六祖に關する傳記の中に、「嶺南の獼猴族出身者であるとしても不思議はない事例・事象を多く含んでい

ることだけは確かである」と指摘された。また、潘重規氏が「敦煌寫本『六祖壇經』中の“獺獠”（『中國唐史學會會刊』1992-3）と題する論文で、「獺」は「獵」の俗字であり、「獠」は「夷蠻」の人で、その多くは漁獵を生計とすることから、「獺獠」を「田獵漁捕之獠人」と解釋されたのに對し、蒙默氏は「壇經中「獺獠」一詞讀法——與潘重規先生商榷」（『中國文化』1995-11）と題する論文を發表し、異議を唱えた。すなわち、蒙氏は、「獠人」と呼ばれる一族には晩唐五代にいたってもなお狩獵の習俗がなかったとしたうえで、「獺獠」を「獵獠」と讀むべきではないとする。これらを受けて、張新民氏が「『獺獠作佛』公案與東山禪法南傳—讀敦煌寫本『六祖壇經』劄記」（『中華佛學學報』16、2003）と題する論文を發表された。張氏は、「獵獠」を「獵獠」としながらも、これを「狩獵する獠人」ではなく、「獵頭（首取り）する獠人」と解釋された。

ところで、本書には「原『壇經』」という古型があったとあらかじめ想定した上で、それが神會派により四次にわたり増廣されて形成されたものが本書である、と論じたのが伊吹敦氏の「敦煌本『壇經』の形成」（『印佛研』44-1、1995）と同氏の「敦煌本『壇經』の形成—慧能の原思想と神會派の展開」（『論叢 アジアの文化と思想』4、1995）である。すなわち伊吹氏は、本書と関連する諸文獻の關係に留意しながら、本書の成長過程を推定されたのである。まず第1次増廣の段階では、「原『壇經』」に存在しなかった「南宗」「頓教」「頓漸」「六祖」などのセクト主義を示す概念や、「看心」「看淨」に對する批判や「無念」の思想などが新たに登場したと推定した上で、「このように見てくると、神會の弟子たちが『壇經』の増廣に着手するに至った経緯が、おぼろげながら見えてくるように思われる。即ち、彼らは、思想的には、神會の絶對的な影響下にありながら、その當の神會を失ったために、神會とは逆に對外的な活動を控えるとともに、自らの思想的正統性を確保し、結束を維持するため、新たに手に入れた惠能の説法の記録に神會の思想を盛り込み、その價值を強調することで、それを生身の神會に代わる據り所としたのである」と指摘された。そして第2段階では、「三科法門」「三十六對法」などを含む内容が登場し、本書に傳授本としての性格を附與することを主要な目的として増廣が行われたとし、さらに第3段階では、(1) 惠能の權威の確立、(2) 修行手段としての偈文の活用、といった2つの目的を達成するために増廣がなされたと分析し、最後に第4段階では、神會の存在の顯示を主目的として増廣が行われたと指摘された。その論證結果は、伊吹氏が作成した下記の圖表によって端的に示されている。



伊吹敦「敦煌本『壇經』の形成—慧能の原思想と神會派の展開」(『論叢 アジアの文化と思想』4、1995、pp.0174-0175) より轉載

ところで、本書について、古賀英彦氏にも注目すべき研究成果が存在する。すなわち、古賀氏の「敦煌本六祖壇經の心偈について」（『禪學研究』70、1992）は、敦煌本壇經の祖本が、まさしく南陽慧忠の非難するところの改換本壇經に相當することを指摘する。更に、慧忠のその批判に留意しながら、『壇經』の改換の諸問題を検討したのが、同氏の「壇經雜識」（『禪學研究』71、1993）である。同氏の「壇經敦煌本の傳法偈」（『禪學研究』73、1995）と「壇經神會原本へ」（『花大紀要』28、1996）は、法海の改竄が「改換壇經」と「添糅鄙譚」を中心とするものであったとすれば、その主張の邪魔にならなかった部分は、神會原本のままに残されているのではないか、という考えのもとに、本書にある傳法偈や祖統説等が、神會の手によって成った可能性があるとして論じられた。このほかに、同氏は「六祖壇經研究枝談」（『佛教史學研究』37-1、1994）と題する論文において、本書の諸本の内容に見られる出入を確認しつつ、『景德傳燈録』卷28にある「南陽慧忠國師語」と韋處厚の撰した鵝湖大義の碑文とを客觀的基準として、本書の諸本の内容とを照らし合わせてみると、次のような認識が得られるとする。すなわち、(1) 神會原本は現存せず、(2) 慧忠に批判的とされた改竄本が敦煌本系テキストの祖本であり、(3) 敦煌本系テキストが修正されねばならなかった、(4) 惠昕本系、契嵩系のテキストはすべて修正本を承ける、というものである。また古賀氏は『『敦煌本六祖壇經』研究雜記』（『禪學研究』75、1997）と題する論文において、前述の本書に関する柳田氏、伊吹氏の見解に對して異議を唱え、それらに含まれた問題点を提起しつつ具體的な檢證を展開されたのである。

一方、本書に含まれる「無相戒儀」の問題については、前述の如く最初に注目されたのが柳田聖山氏である。すなわち、柳田氏は「大乘戒經としての六祖壇經」（『印佛研』12-1、1964 → 〈柳田〉1）を發表し、その中では本書にあった「歸依三身佛」の説に注目され、本書が戒經としての機能を有していると推定されたのである。これに對して小島岱山氏は、「『六祖壇經』と華嚴—敦煌本『六祖壇經』無相戒の思想と華嚴の性起思想」（『禪學研究』68、1990）と題する論文を發表し、五臺山系華嚴の性起思想が無相戒の根據となったと指摘されたのである。續いて高堂晃壽氏が「敦煌本『壇經』における戒の構造」（『駒大禪研年報』4、1993）と題する論文を發表された。この論文において高堂氏は、南北兩宗を代表するものとして授戒儀を有する『大乘無生方便門』、『壇語』と本書の都合3種を取り上げ、これらにおける戒乃至三學の把捉の變容を跡づけなが

ら、初期禪における戒の意義に見られる變化の過程を明らかにされた。すなわち高堂氏は、「『壇經』が「自性」に一切を收斂させる無相戒を提唱することにより、「自性自度」の立場が明確に打ち出され、成佛の方法は本源的に清淨な自性への還歸へと歸着せしめられる・同時に、この態度の表明によって、従來の三學は意義を喪失し、授戒の意義は成佛の方法論の提示へと轉ぜられる。この變化は、修行の階梯としての三學を「戒」の一事に收斂させ、授戒即成佛という「頓悟」の概念を成立させる點で畫期的である」と指摘された。ところが、これらの従來の諸説に對して異議を呈されたのが、前述の古賀氏の「『敦煌本六祖壇經』研究雜記」(『禪學研究』75、1997)と題する論文である。すなわち、古賀氏は無相戒を惠能の原思想ではなく、後人の手によったものであると推定された。この古賀氏の主張を擁護したのが、千田たくま氏の發表した「敦煌本『壇經』無相戒儀の思想と成立時期」(『佛教史學研究』53-2、2011)と題する論文である。すなわち千田氏は、本書の無相戒儀をめぐって、その構成、三身佛の釋義、四弘誓願、無相懺悔などの角度から考察を展開し、無相戒儀の特徴として、「一、三聚淨戒を解體して三歸依だけを問題にする、二、戒儀に四弘誓願が含まれる、という二點が挙げられる」とした上で、その成立時期を8世紀中後期と推定し、これを惠能の眞説とすることはできないと指摘されたのである。

ところで、本書に關する中國人の研究者らによる研究成果も大いに注目すべきであろう。その一端を挙げれば、まず鄧文寬氏は「近年敦煌本『六祖壇經』整理工作評介」(『周紹良先生欣開九秩慶壽文集』中華書局、1997)と題する論文において、1980年代以來發表された郭、金、田、T、楊、潘、鄧の都合7種にも及ぶ本書の敦煌本テキストを、2つの類型に分類することを試みられた。すなわち、鄧氏は佛教史或いは禪宗史の角度からテキストの校訂を行ったとする第1類に郭、金、田、楊の4種を、敦煌文獻という角度からテキストの校訂を行ったとする第2類にT、潘、鄧の3種を入れて、それぞれの長短を論じたのである。

さらに、方廣鋁氏が發表された「關於敦煌本『壇經』」(郝春文編『敦煌文獻論集—紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會論文集』遼寧人民出版社、2001)と題する論文は、その前半部分がかつて神野恭行氏によって邦譯された「敦煌『壇經』新出殘片跋」(『禪學研究』76、1998)の内容であり、後半は諸本の中で敦煌文獻のみに見られる異様な長さを持つ本書のタイトルと惠能の得道偈とを取り上げて先人の研究成果を踏まえながら新たな檢證を加え、本書の

タイトルについては、鄧文寬氏が提案した本題と副題の2部分からなる説を基本的に支持すると述べ、得道偈については、「一元佛性論」こそが惠能の眞意であるとし、「明鏡本清淨、何處染塵埃」を「本來無一物、何處染塵埃」に改めたのは後人の曲解によるものであると指摘された。また、同氏の「敦煌本『壇經』首章校釋疏義」（『中國禪學』1、2002）は、鄭、周、鄭、李、楊、潘の都合6種の校訂本を用いつつ、本書の題名を

「南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經

——六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷兼授無相 戒

弘法弟子法海集記」

とする。さらに方廣錫氏は、これを皮切りに研究班を結成し、本書に對する校釋作業を本格的に展開された。まだ未完ではあるものの、その共同研究の成果として發表されたのが、「敦煌本『壇經』校釋疏義 標題章～第八章」（『方・藏外』10～12、2008）である。すなわち方氏の研究班は本書のテキスト④を底本に定め、①②③⑤を校本にして校釋作業を行い、その際孟、周、李、珠、楊、潘、遼、申、黃など9種にも及ぶ校訂本を參照し、それぞれの校訂本の長短を比較し検討されたのである。

また、本書の題名に對して同じ問題意識を持つ張子開氏は「敦煌寫本『六祖壇經』的題名」（『宗教學研究』2002-3）と題する論文において、矢吹慶輝、郭朋、楊曾文、印順、潘重規、周紹良、鄧文寬、方廣錫の諸氏らによる從來の研究成果を踏まえつつ、本書の敦煌本の出現時期、書寫形式、題名、本文内容などの視點から、本書のタイトルに焦點を當てて考察されたものである。その結果、張氏は本書の題名を

「南宗頓教最上大乘摩訶（波）[般]若波羅蜜經六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷兼受無相戒

弘法弟子法海集記」

と表記すべきであるとする。

一方、黃連忠氏は「敦煌寫本六祖壇經的發現與文字校訂方法芻議」（『法鼓佛學學報』1、2007）と題する論文を發表した。その中で黃氏は、本書のテキスト①～⑤それぞれの發見の經緯、研究の歴史を回顧しつつ、對照表形式で23項目にわたって5種のテキストの書誌學的異同を比定した上で、前述した楊曾文氏の「敦博本『壇經』及其學術價值」で示された見解の不備を指摘された。すなわち、楊氏は敦博本④の字數を12,400字前後とし、④と比べれば①に3

行 68 字の書寫漏れがあったと指摘されたが、黄氏は 1 字ずつ計算したところ、首題や尾題などを含めても、全部で 493 行、11,617 字であるとし、なおかつ①にあった書寫漏れが 3 行 68 字ではなく、5 段 98 字に達していることを突き止められた。さらに黄氏は、「精確性」と「デジタル化」をキーワードとして掲げ、①をはじめとする本書のテキストに頻繁に見られた正字俗字などの字體の問題も視野に入れて本書のテキスト校訂を試みられ、その成果として刊行されたのが、黄氏の編著になる『敦煌本六祖壇經校釋』（臺北、萬卷樓圖書股份公司、2006）である。一方、正字俗字をはじめとする字體の問題を専門に取り上げ、實例を挙げながら緻密な檢證を展開したものに、黄氏の「敦博本六祖壇經文字校正與白話譯釋的方法論」（『敦煌學輯刊』4、2007）がある。

ところで、本書の本文研究に関しては、まず柳田氏による①の現代語譯（『六祖壇經（六祖の戒壇院說法集）』柳田聖山『禪語録』〈世界の名著〉續 3、中央公論社 1974 → 同〈世界の名著〉18、1978）が出版され、その後、佐藤悦成氏による『敦煌新本六祖壇經』（全國曹洞宗青年會事務局、1996）があり、さらに近年、中島志郎氏による④の訓讀および現代語譯（同氏編著『六祖壇經』〈第三期禪語録傍譯全書〉2、四季社、2006）が刊行され、従來難解とされていた本書が、親しみ易い形で我われに提供されたことは喜ぶべきことである。

最後になるが、本書、ひいては慧能研究における集大成と位置づけるべき 2 種の研究成果に觸れておきたい。まず、〈現代佛教學術叢刊〉1 として 1976 年に臺灣の大乗文化出版社より刊行された張曼濤氏の編著になる『六祖壇經研究論集』である。必ずしも敦煌本の本書に焦點を絞ったものではないが、それまでの本書に関する中國語で書かれた研究成果を網羅したものとして注目を集めた。そして 2003 年には、〈中國禪學研究系列叢書〉の一環として、中國大百科全書出版社より刊行された釋如禪氏の主編になる『『六祖壇經』研究』(一)～(五)は、5 冊からなるシリーズで、本書に関する漢語圏の研究成果を網羅したことはもちろん、前述した『六祖壇經研究論集』の刊行以前の重要な研究成果をも収録し、後人の研究に大いに裨益を與えるものである。